殺倶樂部の會長に宛てられたもので有りました。何は兎も有れ貴君は之で奇蹟的に助かつたのですから、それ丈で滿足し、最早此の危險なる事柄を進んで穿鑿だてをすることは止して、直ちに此の家を立退きなさい。私は火急な用事を持つて居ますし、又他方、猶豫なく、先日まで勇敢なる且つ立派な青年で有つた、此の可憐の死骸の後始末をしなくてはなりませんから。』

サイラスは王子の厚誼を感謝し、恭順の意を表して暇を乞ふた。併し彼は王子が立派な馬車を驅つて警察のヘンダーソン大佐を訪問に出掛けたのを見届けるまでボックスコートの中をうろ〳〵して居た。實際共和黨員で有つた彼亞米利加青年は出で行く王子の馬車に對し、殆んど敬虔の念を以て、帽子を脱つたのであつた。そして其の夜彼は汽

車に乗つて出發し、巴里に向つて歸途に就いた。

（是でお醫者と旅行用大鞄の話はお了です。實は天帝のお力につき二三の回想が有つて、原の話には非常に適切な話ですけれども、吾等西洋人の趣味に適して居ませんから、取除くといたしました。たゞスカッダモーア君は既に政界に於て段々地歩を占め、最近の報導に依ると、生れ故郷の町の長官になつたといふことですから、之丈を附加して置くに止めませう。）

二輪馬車冒險物語

陸軍中尉ブラッケンベリー、リッチは、嘗て數有りし印度の丘陵戰の一に於て赫々たる武名を博した人で有る、手づから酋長を捕虜としたのは此の人で有つて、其の剛勇は普く人の賞讃する所で有つた。然るに或る時不幸にも深き刀傷を負ひ其の上一種の酷い麻拉利亞熱に罹つて遂に本國に歸つて來る事になつた時、英國人は彼中尉を第二流の名士として歡迎する準備をさ〳〵怠らなかつた。併し彼は質朴謙遜にして、外觀を顧みないといふ著しき特性を有し、冒險をこそ好んで行れ、人々の追從には一瞥も與へなかつた風の人で有つたから、此の時

も徒らに海外の海水浴場や亞弗利加のマルジアーズ地方を歴遊して居つた。

人の噂も七十五日といふが斯樣なにして愚圖々々して居る間に彼の功蹟に對する評判も倫敦人には既に忘れらるゝに至つた。彼は出來得る限り人目に觸れない樣にして交際季節に這入つた頃始めて倫敦に到着した。そして彼は元來孤兒で有つたし、又田舍に住んで居た遠い親類を除くの外は親戚とても有たなかつたから、彼が本國—嘗ては此の本國の爲めに血を流した事が有つたのだが—の首府に腰を卸ろした時は殆んど一外國人と何等撰ぶ處がなかつた。

到着した翌日彼は或る陸軍將校倶樂部に行き一人で食事をした。其處で彼は二三の舊友と握手をしたり、又彼等から心からの祝辭を受け

たりした。併し皆が皆晩景の約束事を有つて居たから、暫らくすると一人丈になつて、完く思ふが儘の行動を採り得る身となつた。此の時彼は豫め芝居へ行かうといふ下心が有つたから燕尾服を着て居たので有つた。併し一體此の中尉は田舍の學校から直ちに士官學校に入り卒業後又直ちに東帝國の方へ出征したので有つたから、倫敦の樣子は頗る不案内で有つた。それで彼は先つ此の都で種々の娯樂的探險を遣らうと心の臍を極めた。そして彼は洋杖を打振り乍ら先づ西の方面へと出掛けた。

其の夕方は靜かで日は既に西山に沒して了ひ、天は今にも降り相になつて居た。街燈の燈火に照らされ乍ら引切無しに行き交ふ人々の顏は切りに中尉の想像を煽動し始めた。そして彼は此の刺戟多き市街零

圍氣の中で四百萬の人間に取卷かれ何時迄も〳〵歩行して居られる樣に思はれて仕方がなかつた。彼は路傍に打並ぶ家々を打眺め、あの溫く氣持善さ相に燈火が點いて居る多くの窓の内側には果して何が行はれつゝ有るのかと不思議に思ひ、又通つて行く人毎に其の顏を覗き込んで見ると、自分には分らないが、皆善かれ惡かれ何等かの利害關係の爲め一心になつて居るのだと思はれた。

『世間の人は切りに戰爭の話をするが軍人計りの戰爭でなく、此處も人間の一大戰場で有る。』と心の中で思つた。

而して彼は斯樣なに長く街路錯綜人馬織るが如き處を歩み乍ら聊かの珍事に出會しないといふのは實に不思議なことだと思ひ始めた。

『好時機も來れば斯う計りでも有るまい』と彼は考へ『自分は未だ此

の土地に取つては他處人で有る、そして未だ多分他處人風をして居るだらう。併し自分は遠からず此の渦卷の中に卷き込まれなければならぬ身だ。』

夜も既に餘程遲くなつて來た時冷たいどしや降りの雨が急に闇を衝いて降り始めた。ブラッケンベリーはと或る樹の下に息ふた。其の時不圖向ふに二輪馬車の馭者が今空いて居るが乘らないかといふ相圖をして自分を招いて居るのを見た。丁度の處で有つたから、彼は直ちに洋杖を擧げて應答に換へた。すると間もなく此の青年士官は倫敦ゴンドラの中の人となつて了つた。

『何處へ參りませう?』

『何處へでも御前の好きな處へ行け!』

二輪馬車は直ちに、可驚速力で雨を冒して別邸の多く建つて居る町へ走り込んだ。別邸は何れも皆同じ格好をして前に庭園が設けられて有つた。ブラッケンベリーは洋燈は點いて居るが人通のない市街と、新月形になつて居る街衢とを區別する事が殆んど出來なかつたので、其の兩方の街路を通つて二輪馬車は飛ぶが如く馳せ進んで行つたとき、彼は忽ち西東が悉皆分らなくなつて來た。彼は馭者が同じ狹い區域をぐる〳〵、廻つたり、出たり這入つたりして、惡戯をして居るのではないかと思はないでもなかつたが、併しそれにしても速力が如何にも大なので眞逆左樣ではなからうと信じて居た。馭者は勿論考へが有るので何處か一定の目的地に急いで行つて居るのだらう。斯う思ふと今度は那樣な迷路を通つて路を選むで行く馭者の巧妙に喫驚せざるを

得なかつた。そして何故那樣なに急ぐのかしらと少しは心配し始めた。

彼は嘗て田舍者が倫敦で不運な目に遭ふといふ話を聞いたことが有るが、此の馭者は或はある兇惡なる背信漢の團體に屬して居るので自分は目下悲慘なる死に出會す爲に連れ行かれて居るのでは無からうかと危懼の念が次第に湧いて來た。

斯く考へ浮んだ頃馬車は廻り角の處をシユートと廻つて、長くて廣い道に沿ふて居た或る別邸の花壇の門前に到着した。其の家は目映しい許りに燈火が點いて居て、今一つの二輪馬車は丁度今一紳士を屆けて馳せ去り、そして其の紳士は玄關から這入つて、直ちに仕着を着けた多くの召使に迎へられて居た所で有つた。彼は御者が或る接待會の催せられて居る家の正面に急に止つたのだと一度は思つて喫驚したが、

又何か不意の出來事の爲めでも有らうと思ひ直して、平氣で車中に在つて煙草を吹かして居る中、頭上の車蓋が取り除けられる音を聞いたので、今度は少々當惑の體で有つた。

『到頭此處に參りました。』

『此處？此處とは一體何處だ！』

『貴方は私の好きな處へお連れ申して可いと仰有しやいましたでは有りませんか。』と馭者はクツ〳〵笑つて、『だから此處へ參りましたので御座います。』

左樣言つた馭者の音聲は斯く卑しい身分の人としては可驚程滑かで且つ丁寧で有るとブラツケンベリーには思はれた。そして非常な速力で馬車を驅つて來たことや、又其の馬車は普通の乘合馬車よりも一

層贅澤に裝飾して有つたことなど思ひ浮べて、今更乍ら不審の念に掩はれた。

『それはそれとして先づ此の説明を聞かなきやならない。それとも私を雨の中に抛り出さうといふのか。何しろ車から降りるか否かは自分の勝手にさして貰ひたいがね。』

『無論其の御選擇は御勝手で御座います、併し此のことを逐一御説明致しますと、貴方々の樣な紳士は屹度拒絶はなさらないといふこと位は私だつて存じて居ると思ひます。實は今晩此の家に紳士の會合が御座いますのです。こゝの御主人は倫敦には不案内の方か否か、又お知合が被居しやるのか否か、猶ほ又變つたお考への有る方で被在しやるか否かも私一向不案内で御座います。併し私はたゞ燕尾服を着てお出

でになる獨身の紳士を幾人でも勝手にお連れして宜しいと吩付けられて居るのです。そして出來得ることなら陸軍將校をといふ御注文で御座いました。貴方はたゞお這入りになつてモリスが招待したのだといふことを仰有しやればそれで宜いので御座います。』

『すると君がモリス君かね。』

『否々、モリスといふは此の家の主人で御座います。』

『妙なお客の集め方も有つたものだね。併し風變りの男なら別に人を怒らせる積りでもなく面白半分斯樣な風のことに耽るかも知れないね。處が今假りに私が其のモリス君とやらの招待を斷つたとしたら、一體何うするのだ。』と一歩進めて訊いて見た。

『私はたゞ貴方をお乘せ申した處までお連して、そして夜中まで別の

方を捜しに出掛けるのみです。彼樣な冒險に嗜好を有たない人は自分のお客ではないとモリス樣は仰有しやいました。』

此の一言で中尉は立所に處決した。

『案の通り餘り長く經たない中に冒險に在り附いたことだ。』と馬車から降り乍ら自分で追懷した。

中尉が漸く人道に下り立ちて、賃金を渡さうとして未だ衣嚢の中に手を入れて探ぐつて居た間に馬車はぐるりと方向を轉換して、今來た道を前同樣矢の如き速力で馳せ去つた。ブランケンベリーは驚いて後から呼ばつたけれども馬車屋は振向もしないで眞一文字に進んで行つた。併し家の中の者どもが此の叫び聲を聞き附けて、復た再び扉を開けたものだから花壇は燦爛たる燈火の爲め照らされた。忽ち一人の召

使が洋傘を翳して彼を迎へる爲め走り下りて來た。

『馬車屋へは既う拂つて御座います。』と其の召使は大層丁寧な口調で會釋してブランケンベリーを門前から玄關の階段へと案内した。すると玄關の大廣間では五六人の他の召使が遣つて來て、帽子を取つたり、洋杖を受取つたり、外套を脱がせたりした。そして其の代りに番號附きの一枚の札を呉れ、そして階段を急ぎ上つて呉れと鄭重に言つた。其の階段は第一階の室の入口まで熱帶地方の草花で立派に裝飾して有つた。上り詰めた所には一人の眞面目腐つた食堂附の男が居て、彼の名を訊ね、そして『陸軍中尉ブラッケンベリーリッチ殿』と呼ばつて應接室へと案内した。

丈のすらりとした珍らしい程綺麗な一青年が進んで來て嫻雅なる又

愛嬌の有る樣子をして彼に會釋した。其處には一番上等の蠟燭が數百となく點つて居て宛然白晝の如く珍草佳木妍を競ひ嬋を爭つて部屋の周圍を飾り、丁度今上つて來た階段の樣に、香氣馥郁として滿堂に充ちて居た。側に在る一脚の卓子の上には山海の珍味山の如く積み重ねて有つた。而して其の間を五六の給仕が行きつ戻りつ果實とか三鞭酒の盃等を運んで居た。一座は總體凡そ十六人、殆んど皆血氣旺盛の人計りで、外見上皆大抵勇猛な相を備へ且つ中々確乎した容子をして居た。彼等は二組に分れて一は玉投臺に、他は一脚の卓子を取卷いて仲間の一人が親になりバカラット骨牌の賭金を持つて居た。

『ハ、分つた、秘密賭博場に來たのだな、そして先刻の馬車屋は客引きだな。』とブラッケンベリーは考へた。

主人公が未だ握手を止めないで居た間彼は斯く萬事詳細のことを觀察し、又如何なる目的の爲めに斯樣なことをして居るのかといふことをも考へて見たが、何うしても合點の行かないのは主人公モリスの身上で有つた。二度目に見たときは前よりも一層喫驚せざるを得なかつた。モリス君の動作は如何にも無理が無く優美な事や、氣高い中にも愛嬌たつぷりで、しかも顏には凛とした勇猛の氣象が仄見えて居る處は、前思つて居た樣に地獄の主人公などゝは到底思へなかつた。そして其の話し振りの上品なことは屹度地位並びに功績の有る人の樣に思はれた。ブラッケンベリーは何だが此の主人公が好きだと思ひ始めた。實際彼は見知らぬ人を好くといふことは自分の弱點だと思つたが、モリス君の人格並びに其の性格に對しては自から奥床しい友愛の情が起

つて來て到底それに反抗することは出來なかつた。

『リッチ中尉殿、私は嘗て御芳名は承はつたことが御座います。』とモリス君は音調を低くして、『處が思ひ掛けなくも今夜此處でお目に掛かることを得まして誠に滿足の至りです。いや貴方が印度からお歸りになる前のあの御評判も只今斯うして拜眉の榮を得まして成程と存じます。私が招待狀も出さず唐突に此處にお連れ申したことは誠に恐縮の至りで御座いますが、若し暫らく之を御咎め下さらないならば、私は此の御光來を光榮に存ずる計りでなく、又心から喜悅の情に堪へない次第で御座います。印度の猛騎を一息に呑むの慨有らせらるゝ豪いお方ですから』と打笑つて『無禮講位では假令何んな程度のものでも恐怖なさいます樣なことはよもお有りでは御座いますまい。』

而してモリス中尉を傍棚の方に連れて行つて三鞭酒を勸めた。

『成程彼は大層愉快な奴だ、そして屹度此の會合も倫敦で最も面白い會合の一に相違なからう。』

と考へ乍ら中尉は勸められた三鞭酒を盛んに傾けたが、それは大層勝れたもので有つた。そして來客の多くは既に喫煙して居たから、彼も自分の馬尼剌煙草に火を點けて、玉投臺の方に歩み倚り、そして時には賭をしたり、又他の人々の出來映を笑ひ乍ら見て居た。那樣なにして時間を空費して居た間彼は主人モリス君が賓客全體を非常に嚴しく吟味して居るのに氣附いたので有つた。モリス君は表面上主人役で忙殺され此處彼處を飛び廻つて居たものゝ、實際に於ては始終鋭い目附をして方々を睨み廻はして居たから、賓客の中たゞの一人でも其の

不意の鋭鋒を避け得るものはなかつた。

モリス君は賭で損をした人達の顔付きに目を附けたり、賭の量を調べて見たり、二人で熱心に話して居た秘密談の立聽などして居た。換言すれば其處に居た人で主人の注意の外に有る者は殆んど一人も無いと謂つて可い位で有つた。ブラッケンベリーは斯樣な賭博場が果して有るかしらと疑ひ始めて來た。何うも彼には此處は或る秘密審査をする所の樣にしか思はれなかつた。彼はモリス君の一擧一動に注目して居たが、主人公は常に微笑を洩らして居たものゝ、恰かも笑といふ假面の下に憔悴せる、心配で疲れ切つた、且つ不安相な心を有つて居た樣に見えた。ブラッケンベリーの周圍の人々は高聲に談笑し乍ら競技に耽つて居たが、彼は斯樣なお客達には一向に興味を失つて何等の注意

を拂はなくなつた。

『此のモリス先生は大層忙し相だが、屹度何か心に深い目論見が有るに相違ない。是非それを一つ搜つて見たいものだ。』と彼は考へた。

猶ほ仔細に觀て居ると、モリス君は時々訪問客を一人宛隣りの控室へ呼び込んで簡單に對談をしたと思ふと自分は一人で應接間に歸つて來て、そして呼ばれた客は又と顔出しをしなかつた。新く呼ばれては姿を隱すのを見て居たが、五六人目になつたときブラッケンベリーの好奇心は非常に嵩まつて來て直ちに、先づ、此の來賓が居なくなるといふ一秘密の眞相を見究めようと決心した。そして隙を窺つて其の控室の中に歩き寄つて見ると一方窓の引込んだ處が有つて、それが美しい當時流行の綠色窓掛で隱されて有つたので、是幸と中尉は此處に

急いで身を隠した。すると間もなく應接間の方から足音や話聲が段々近づいて來た。占めたと窓掛の間から透して見ると、モリス君は一人の肥滿した赭顔の何だか旅商人らしい顔付きをした人を連れて這入つて來た。此の男は食卓に着いて居たとき粗野な笑方をしたり、不作法のことをするので彼は最前から既に眼を附けて居たので有つた。二人は窓の直ぐ側の所で止まつた、それ故ブラッケンベリーは次の談話の一言をも聞き落しはしなかつた—

『何うも誠に相濟みませんでした！』とモリス君は慰撫する樣な態度で言ひ始めた、『そして私が打附けに申し上げても何卒お咎め下さらない樣に願ひます。倫敦の樣な廣い場所では偶然の間違事は始終起つて參るものです、それでそれと知れたらお互になる丈早く應急手段を講

じることが肝心です。私は貴方が何かのお間違でうつかり此の茅屋へお出で下すつたのだと察します。それといふもお打開け申し上げますが、私は乍失禮今迄貴方に拜顔の榮を得たことがない樣に覺えますのです。迂濶いことを言はないで—名譽を重んずる吾々の間のことですから、たゞ一言お尋ねすれば充分でせう—改めてお訊きいたしますが、貴方は今誰の家に居ると思召しになりますか。』と中々手嚴しい調子で有る。

『モリス樣のお宅に居るのです。』と商人風の男は非常に當惑して答へた—實はモリス君が言ひ終る頃から此の男は目に見えて狼狽して居たので有つた。

『モリスと仰有つてもそれはジョンモリス氏ですか、それともジェー

ムスモリス氏ですか。』と主人公は折り返へし訊いた。

『それは何方らか存じませんのです。』と極のわる相な樣子で有つた。

『丁度私と貴方との間に等しく其の方とは個人的に知合にはなつて居ませんのです』

『成程分りました。此の街のずつと先の方に同名の人が居ります、其の番地は存じませんが巡査にお尋ねになれば屹度お分りになりませう。いや飛んでもないことで御面會の榮を得て今迄御交際を願ひますことが出來ましたのは心から難有く思つて居ります。そして不遠再び今一層正式に拜顏の機會を得たいものだと存じます。で今の處、貴方は御友人の處にお出にならなければなりますまいから、强いてお留めは致しません。』ジョンよ、』と彼は聲を揚げて『此の方の外套を出し

てお上げ申せ。』

斯くてモリス君は非常に溫和なる態度で其の訪問者を控室の入口の所迄見送つて行つて、其處でジョンに案内を一任した。彼が客間に歸る爲め窓の前を通つたとき、中尉は耳聳てゝ聞いて居ると恰かも胸に非常な心配事が有り、神經は今晩の苦勞の爲めに既に疲れ果てたものゝ如くホッと深い溜息を吐き乍ら行き過ぎたので有つた。

大方一時間の間馬車は次々と到着して來て、モリス君は一人の客を送り出したかと思へば新來の客を迎へねばならなかつたので、賓客は新陳代謝して其の數は始終同じ位で有つた。併し一時間の終り頃には到着も段々と少なくなり、又間隔も遠くなつて遂に完く止んで了つた。けれども來賓削除の手段は前同樣盛んに繼續せられた。軈て應接間の

來客は殘り少なになりバカラット骨牌の遊戯も親となる人がなくなつたが爲め、自然止んで了つた。二三人は自分等で樣子も分つたと見へ自ら進んで暇を告げたので、モリス君は別にそれを引き止めようともしないで、言ふがまゝに送り出した。そして其間モリス君は殘つた人々に人一倍鄭重な歓待をし、機敏にして同情に充ちた顏附、又最も適切な且つ愉快なる話をし乍ら切りに走り廻つて人毎に應接して居た。其の態度を見ると彼は主人ではなくて先づ主婦といふ段取で有つた。そして婦人の樣な媚笑を漏らし擧止が如何にも慇懃で有つたから完く皆の心を魅して居た。

客が段々少なくなつたとき、リッチ中尉は少しの間應接間から玄關の大廣間へ新鮮なる空氣を得んとして、ぶら〳〵歩いて這入つて行つ

た。併し彼が控室の閾を越すや否やこは抑も如何に……彼は礑と立ち止まつた。先刻まで綺麗に咲き揃つて居た多くの草花權木の植木鉢は階段から取り去られ、三つの家具運搬馬車が花園の入口の前面に横へられ、召使等は方々の家具の取外しに忙殺せられて居た。そして其の中の或る者は段に大外套を着て出發の用意をして居るものさへ有つて、恰かも何もかも請負で用意せられる田舍舞踏の終つた時の樣で有つた。ブラッケンベリーは暫らく立ち止つて考一考せざるを得なかつた。卽ち先づ第一眞箇の客でなかつた來賓は皆追ひ歸されたこと、次には一時雇入れの召使は現に退散しつゝ有つたことであつた。

『此の世界は一切贋物で有つたのかしら？　一夜造りの幽靈屋敷で夜の明ける迄には消え失せるもので有るのかしら。』と中尉は自ら怪訝の

念に堪へなかつた。

ブラッケンベリーは其の家の階上の部屋を見んものと適當の機會を見計らつて階段を飛び上つて行つた。果して彼が豫期した通り何れの部屋にも家具の缺片も又壁上には一面の額さへ見附らかなかつた。其の家はペンキで塗つて又色紙で貼つて有つたものゝ現に空屋同樣の有樣なるのみならず、今迄とても確かに人が住んで居たものではなかつたらしかつた。青年士官は彼が到着した時の其の外觀の立派な、且つ整頓せられた、そして氣持の好かつた樣子を回想して不尠喫驚し、且つ人を瞞着する爲め、那樣な大規模で道具を運び出すといふのは、非常な費用を掛けたに相違ないと思つた。

一體此のモリスといふ男は誰で有らう？　又遠い倫敦の西外に於て

那樣なにたゞ一晩家主になるといふのは何ういふ意で有らう？　又何故彼は訪問客を市中で手當り次第拐誘したので有らう？

ブラッケンベリーは斯樣なことを考へ乍らも既に隨分長く愚圖々々して居たことと氣が附いて仲間の所へと急いで下りて來た。多くの客は彼の留守中どし〳〵出て行つたと見えて先刻迄非常に混雜して居た應接室には中尉と主人公を加へて僅か五人しか居なかつた。中尉か其處に歸つて來たのを見てモリス君は顏に微笑を湛へて之を迎へ、そして直ちに椅子より立ち上がり—

『いや折角御勝手のお樂のお邪魔を致しまして御來臨を忝ふいたしましたが、既う其の次第を御説明いたしても宜い時機だと存じます。私は貴方々が今晩御退屈では被居しやらなかつたで有らうと存じま

す。併し打明けて申し上げますが、其の目的はお暇の時で御欵待を致し御愉快を盡して頂くといふのではなく、實は目下不仕合にも非常に窘迫の場合に遭遇して居る私に御援助をお願ひ致したいので御座います。貴方々は皆紳士で被在しやいます。』と言を改めて『貴方々の御風采を拜見すれは解ることで、私はそれ以上の保證は求めません。で御座いますから、私は隱し立てなく申し上げます。私は貴方々に一つの危險な且つ愼重の取扱を要する仕事をして戴きたいと思ひますのです—危險と申す譯は貴方々の御生命を賭けて戴くことが有るかも知れませんからです—そして愼重の取扱と申すのは貴方々がこれから御見聞被成ことは皆絶對秘密にして戴かなければならないからです。私風情の完くの不見識者から斯樣な重大な要求を致すのは殆んど可笑し

い位に突飛な事で、夫は私だつてよく承知致して居ります。だから私は只今申上げますが、若し此處にお出での方で既に何事によらず世間の事を充分お聞になつた方とか、又冒險的自信なく且つ一面識のない者に狂熱的赤誠を捧げることには何うも心が進まないと思召す方がお有りで御座いましたら、御遠慮なく仰有しやつて下さい。直ちにお別れの握手を致しませう。斯かる方には早速お暇を告げ世間並眞面目な生涯に早くお立返りならんことを希望いたすので御座います。』

一人の丈の高い黑い顏の男が鄭重にお辭儀をして直ちに彼の質問に答へた、

『私は貴方の卒直なお話を承はりまして誠に敬服致しました。しかも私は歸らして貰ひませう。私は批評がましいことは申しませんが、

たゞお話を聞いた丈では私は大いに疑懼の念を抱くに至つたといふこと丈は申し上げて置きませう。今申した如く、私は歸ります、それで貴方は多分今歸る位なら何もそれに就いて彼此言ふ權利はないと思召になるかも知れまんが……』

『所が左樣でないのです、私は何んでも喜んで拜聽いたします。私の申し上げたことは之を誇大して申し上げることの出來ない位重大なことで御座います。』とモリス君は遮つた。

『すると諸君、何うお考になりますか。』と此の丈の高い男が皆に向つて言つた。『歡樂も最う是で澤山です、何事にも手を着けないで御一緒に歸りませう！私のいふ通りになされば明朝佳い事をしたとお思になつて、晴れた氣持でお目覺になることが出來ますでせうよ。』

彼は此の最後の詞を非常に調子よく言つたので其の意味を一層よく徹底せしめた、そして自分でも眞面目腐つた底意あり氣な一種奇異なる顏をして居た。來客の一人は急いで立ち上り、喫驚した樣な顏付をして退出の用意をした。後に踏み止まつたのはたゞ二人丈で有つた。

卽ちブラッケンベリーと年取つた赤い鼻の騎兵少佐某で、彼等は冷靜なる能度をし、そして以心傳心的に互に目配をして相見交はしつゝ、のみで、他の一切のことには不關焉の態度で、今盛んに演つた演說などには耳も傾けなかつた。

モリス君は逃げ行く二人の人を玄關の處まで送り出し。彼等が出るや否や扉を固く閉めた。そして客間に歸つて來るや、之で一先づ安心と謂はんばかりの表情をし、俄かに活氣附いて來て二人の將校に次の

如く語り出した—

『私が諸君をお選びした仕打はいやはや全く聖書のあのジョシュア同然ですな。そして私は倫敦中最適任者を得たと思ひ誠に幸福と存じます。諸君のお顔附が先づ私の馬車屋の目に附き、それから私の意に適つたのです。私は奇態な集會中に諸君を置き秘かに諸君の行動を窺つて居りましたが。しかも最も並外れた事情の下に諸君をお試致しましたのでした。即ち諸君の骨牌の取り方とか賭に負けられたときなどの御樣子に氣を附けて居ました。そして最後に誰が聞いてもたじろく樣な嚴しい宣言を致してお試して見ましたけれども、諸君はそれを晩餐會の招待を受けた位にしか思つて被居しやらなかつた樣でした。誠に感服の外は御座いません。私が多年歐洲中最も勇敢なる最も賢明な

る王子の仲間となり門弟となつて居たといふことは、全く無益なことでは御座いませんでした。』

『バンダーチャングの戰のときは、』と騎兵少佐は勢込んでモリス君に向ひ、『私は十二人の義勇兵を募集致しました、すると、私の分隊に居た騎兵は皆附いて行かうと言つたことが有りました。併し今晩の賭博團體は砲火の下の聯隊とは事違つて二人位で御滿足なさるでせうと思ひます。そして此の吾々二人は如何なる困難の場合でも何處までも押し通して往くもの共ですからね。今逃げ去つた二人の者共は私は最も卑怯な奴輩だと思ひます。』此度はブラッケンベリーに向ひ、

『リッチ中尉殿、私は近頃貴方のことに就いては隨分承はつて居りますが、貴方も私のことを屹度お聞及になつたことゝ存じます。私は

オールーク少佐で御座います』と言つて老武士は握手せんとして手を青年中尉の前に差し出したが其の手は赤くて且つ年の所爲か顫へて居た。

『倫敦廣しと雖も御名を聞かないものは恐らくは居りますまいと存じます。』とブラッケンベリーは答へた。

『嘸てモリス君は、』『斯うなつて始めてお二人に對して充分にお禮を致した譯で御座います—私は斯うして貴方々お互にお知り合になつて頂くことより外何にもお役に立つとはようしないので御座いますから。』

『して、御依頼の件といふのは何か決闘でもするのですか。』とオールク少佐が訊くと、

『兎に角一種の決闘です。知れて居ない危險な敵との決闘です。そし

て或は一命を賭して頂くことが有るかも知れないと思ひます。モリス君は猶ほも續けて、『最う私をモリスと言はないで、何卒か、ハンマースミスと呼んで頂きたいものです。私の本當の名前並びに私が何時か近い中に貴方々に御紹介致さうと思つて居ります今一人の男の本名は、何卒詮索がましくお尋ね下さらない樣にお願いたし置きます。其の男は三日前急に行衛不明になりまして今朝に至る迄何等の消息も御座いません。私の胸中も御賢察を願ひ度いのですが、實は彼は或る不正事件を内密に處置しようと目下頻りに從事中で御座います。先達て輕々しく誓つた不仕合なの約束の爲めに束縛せられて居るので、どうしても、一人の陰險な且つ獰惡極まる無頼漢を法律の力を藉らずして遣つ附けなければならない事になつて居るのです。既に私の友人二人

—其の中一人は私の眞の弟でしたが—此の事業の爲めに殪れました。今度は屹度彼自身で其の同じ破滅的冒險に從事して居るのです。併し未だ猶ほ生存して居り、又十二分の希望を有つて居るのです。』夫は此の手紙を御覽下されば充分お解りになる事と存じます。』

モリスといふもハンマースミスといふも實はゼラルヂン大佐に他ならなかつたのだ。斯くて大佐は一通の手紙を兩人の前に出した—

『拜啓來る水曜日午前三時リゼント公園内ロチエスターハウス庭園の小庭門迄御來車下され度候。然すれば其處にて全く小生の味方なる男出迎致し庭内に御案内申す可く候。何卒時刻は非常に正格に願上候猶ほ御出發の際は小生の刀匣を在中物共御持參下され度且又相叶ひ候はゞ小生を未だ御存じ無き一二名の勇敢にして分別有る紳士

を御同伴下され度候。此の事柄に小生の姓名は勿論御使用下され間敷願上候。

ティー、ゴッドオール

ハンマースミス少佐殿

兩人が此の手紙を興味を以つて讀み了つたときゼラゼヂン大佐は徐ろに口を開いて——

『此の差出人は別段の人ではないとしても、其の智慧のみで言つても、中々傑いので、彼の分別には誰でも否應なしに服從しなければならないのです。私はロチエスター館の近傍に行つたこともなく、又貴方々と御同樣に私の友人の窮境といふのは果して如何なる性質のものか未だ承知致して居りません。私は此の註文を受けるや否や、一人

の裝飾請負師の所に參つて依頼して來た結果、僅か數時間の中に此の今吾等が居ります家が先刻御覽の通りの派手な樣子に飾られたのでした。此の考へは少くとも私の獨創でしたか、遂に私はオールーク少佐殿並びにブラッケンベリーリッチ中尉殿のお手傳を願ふことを得るに至つたのですから、大成功で此の度の擧を心から滿足に思つて居ります次第です。併し近邊の僕婢共は明朝は非常に奇態に思ふことでせう——何しろ今晩赫々と燈火で照らされ、來客で一杯で有つた此の家が明朝は空屋となり賣家となる譯なのですからね。兎に角、容易ならぬ心配の裏にも時に斯かる面白いこともあるものです。』と附け加へて得意滿面で有つた。

『而して其の上愉快な結末を附けたいものですね——』とブラッケンベ

リー竿頭一歩を進めて附け足した。

大佐は懐中時計を出して見て——

『既う彼此二時になります。まだ一時間の暇か有ります。そして輕快なる馬車は何時でも出發の出來る樣入口の處で待つて居ます。それで念の爲め今一度お尋ね致しますが、愈々貴方々の御助力を當にしても宜しいでせうか。』

『乍憚私も隨分長い生涯を送つて來ましたが、未だ嘗て一旦承諾して置いて手を引いたり、又上手を賭ける樣な卑怯な仕打杯を致したことはないのです。』とオールーク少佐は意氣軒昂の體で有つた。

ブラッケンベリーも負けず劣らず非常に適切な語で、何時でも一臂の勞を辭せないといふ意を明瞭に示した。そして彼等が葡萄酒の一二

杯を飲み乾した後、大佐は二人に裝塡した連發拳銃を一つ宛渡した。

斯くして三人は馬車を驅つて件の處を指して進んで行つたので有つた。

ロチエスター館はリゼント公園側の運河堤防に臨んだ宏莊なる屋敷で有つた。廣い庭園が設けられて有つて、近隣の雜沓を全く遠ざけて居り恰かも或る大貴族か大富豪の鹿狩公園の樣に思はれた。併し街道から見た處では、此の館の數有る窓は何れも眞暗で燈火の氣合もないし、丁度主人公が久しく歸つて來ない留守宅同然に見えて居た。

馬車から降りた三人は譯なく一小門を見附けたが、それは二つの庭園の壁と壁との間の細道に在つた一種の裏木戸で有つた。約束の時間迄には未だ十分か十五分有つたが、此の時雨が繁く降つて居たから、

冒險者達は垂れ懸つて居た常春藤の下に軀を隱くし乍ら將に來らんとする試合に就いて聲を秘して相談して居た。

處かゼラルヂンが急に指を擧げて二人の談話を制し、そして三人は何事の起るやらんと一心に耳を澄まして居た。

すると蕭條と降りしきつて居た雨音の中から、二人の跫音と話聲とが壁の內側から段々と聞ゑる樣になつた。そして彼等が稍近くなつた時、可驚鋭敏な聽覺を有つて居たブラッケンベリーは彼等の談片をまでも聽き分けることが出來た——

『墓は堀れましたか。』と甲が訊くと、

『堀れました。』と乙が答へ、『月桂樹の生籬の後です。奴を遣つ附けて了つたら、其の死骸の上に杙の樣なものを澤山積み重ねて置きませ

う。』

甲は大層愉快相な聲で笑つたが、外側に居た三人は之を聞いて慓然として身を竦めた。

『今から一時間以内には屹度ですよ。』と矢張り甲の聲で有つた。

其跫音に依つて察して見ると二人は分離れて、一方は裏木戸に近寄り、他方は反對の方向へと互に遠ざかつたといふことが明瞭に分つた。

忽ち裏木戸は静かに開けられ、白い顔か細道にヌッと覗いた。それから手を出して三人の者を招いた。そこで三人は沈默の裏に、其の庭門から這入つた。すると其の男は直ぐ扉を閉めて錠を卸ろした。そして三人は案内者に附いて、羊腸たる花園の小徑を通り抜け、館の厨房の入口に達した。見ると臺所道具とては一つもなく、たゞ三和土に

して有つた厨房の中央に一本の蠟燭か點つて居たのみで有つた。四人が其處から紆曲した一鎖の階段を昇つて階上に行かうとすると、途中鼠の騒ぐ音が消魂ましく聞えたので、愈益其の家は荒廢して居るのだと思はざるを得なかつた。

案内者は手に燭臺を持つて先導した。此の男は腰は曲つて痩せこけては居たが、中々見掛けに依らぬ敏捷な男で、始終後ろ向になつて静粛にしろと注意したり、手振で警戒したり、盛んに氣轉を利かせて居た。ゼラルヂン大佐は、一方の腕には刀匣を抱へ、他方の手には拳銃を用意して、老人の直ぐ後ろに附いて行つた。流石のブラッケンベリーも氣が氣でなく彼の心臓は劇しく鼓動して居た。それも中尉は未だ幾分か時間の餘裕か有ると思つて居たが、此の老人の水も洩さぬ注意

振や、又目に見えて活氣附いて來たのを見て、活動の時機も既に差迫つて居ることを察知したからで有つた。一體此の冒險の委細の事は完く不明で有つた上非常に心身を壓迫するやうに感ぜられ、又所といへば人殺をするに屈强な場所柄とて誰とて可怖からないものはなかつたが、列の一番後をのこ〳〵附いて來て居た若いブラッケンベリーよりも、一番先導に立つて居た老人の方が怖氣附いても可い譯で有つたのだ。

階段を上り切つた處で案内者は一小室の扉を開けて三人の將校を内へ案内した。其の部屋は煤煙が起つて居た洋燈と少し計りの暖爐の火とで照らされて居り、そして煙突の片隅には、今や壯年期に這入つた計りの、體軀は頑丈では有るが、而かも嫻雅にして威嚴の備はつて居

る顏付をした一人の人が椅子に倚つて居た。其の態度併びに表情は泰然自若たるもので、彼は非常に愉快相に悠然と葉卷煙草を吹かして居り、そして彼の側に在つた卓上には泡立つ飲料の大洋盃が載せて有つて馥郁たる香氣を部屋中に放つて居た。

『何うも御苦勞樣。』と此人はゼラルヂン大佐に握手の手を出した。『君だから屹度時間通りに來て呉れるだらうと當にして居たのだ。』と言ふと、

『間に合つたといふことでなしに私の熱誠を當にして戴きたいので御座います。』と大佐は一禮して答へた。

『君の友達に紹介して貰はう。』と王子は言つて、そして其の紹介が濟むと非常に典雅なる且つ懃慇なる態度で、『私は實に貴方々に斯樣な事

よりも一層愉快な事物をお願致し度いので御座います。一體容易ならぬ事件で斯樣なにお知り合ひになつて戴くなど殊に恐縮の至りで御座います。併し事件が非常に切迫して居りまして、社交の義務云々のこと杯言つて居られませんのです。今晩斯樣なに不愉快な事にお誘ひ申しまして誠に相濟みませんが、何卒か御勘辨をお願ひいたしたいのです、又屹度御勘辨下さることだと存じます。貴方々の樣な立派な御性格の方はたゞ單に私共に大なる眷顧を與へて居て下さるといふこと丈で御滿足下さることゝ存じます。』

『殿下よ』とオールーク少佐はそれと感附いて叫んだ、何卒か無作法をお許し下さいませ。私は言いたいことを腹に有つて居ることの出來ない性分で御座います。先刻まではハンマースミス少佐殿をそれだと

思つて居りましたが、ゴッドオール樣は愈々それに相違がないと存じます。倫敦に於てボヘミヤの王子フロリゼル殿下を知らない人を二人迄見附けたいなど餘り蟲の好いお話で到底出來た御註文では御座いません。』

『フロリゼル王子。』とブラッケンベリー中尉も喫驚して叫んだ。

そして彼は非常なる興味を以て今眼の當り拜することの出來る名聲赫々たる王子の面貌を熟々と打眺めるので有つた。

『私は自分の匿名が露見たからとて落膽は致しますまい。』と王子は答へた、『それも却つて一層厚くお禮を申述べ得る樣になるからです。貴方々はゴッドオールなると將又ボヘミヤの王子たるとを問はず、同樣に御盡力下さることゝ存じます。けれども私は王子として貴方々に多

くお禮を致すことが出來ますでせう。ですから兎に角得は私の方に有るのです。』と彼は鄭重なる態度で附け加へた。

『聽て王子は二人の將校を對手に印度軍隊並びに本國軍隊のことに就いて談話を交へたが、此の方面の問題に就いても王子は他の事件に於けるが如く可驚程事情に精通して居り、又的確なる意見を有して居たので、二人は舌を捲いて感歎した。生死を賭する程の怖ろしい危險を眼前に控へ乍ら、悠揚として迫らざる王子の態度には一種言ふ可らざる卓拔なる點が有つた。爲めにブラッケンベリーは尊敬驚嘆の念を禁ずる能はなかつた。又王子の會話の魅力や、話振りの非常に温良なることにも彼は同じく感じて居た。一々の擧動や一々の音聲の抑揚が啻にそれ自身高尚なるのみならず、又運好くも之れを聞き、且つ之れ

を見て居た人をも高尚ならしむる樣に思へた。で有るからブラッケンベリーも大いに感奮興起して此の王子の爲めにこそ勇敢なる男子が喜んで生命を捨て得るのぢやと一心に思ひ詰めたので有つた。

斯くして數分間經過した後、先刻三人を部屋に案内し、其の後靜かにして隅の處に居た老人は手に懷中時計を持つて居たが、俄かに立ち上つて王子の耳に何やら一語囁いだ。

『それで結構です、ノエールさん。』とフロリゼル王子は判然答へて、それから他の人々に向ひ、『誠に相濟みませんが私は今此の部屋の燈火を消して了つて貴方々を此處にお待たせして置かなければなりません。時間は既に切迫致しました。』

ノエール醫師は洋燈を吹消した。其の時曉を豫報する微かなる灰色

の光が窓を射て居たが、未だ部屋の内部に差し込む程の強さでもなかつた。そして王子が立ち上つたとき其の容貌を識別することも、又彼が話をしたときに屹度見ることの出來た情緒の性質をも此の時は揣摩することが不可能で有つた。王子は入口の方に進んで、其の一方の端に非常に注意した姿勢で停立し、そして言つた、

『何卒、嚴密に沈默をお守り下さつて、そして成るべく暗い處に匿れて居て下さい。』

三人の將校と一人の醫師は急いで命に從ひ身を匿した。それから暫らくの間ロチエスター館に於ける物音とては壁板の後ろで鼠が騷く位のもので、萬籟寂として靜まり返つて居た。軈て十分間も經つた頃蝶番のキート動く音が消魂しく闇を破つて響き渡つた。そして少し經つ

て厨房の階段を昇つて近づいて來る緩くりした用心深い足踏が明かに聞えた。侵入者は一足毎に立止まつては耳を澄まして居た樣に思はれた。そして此の止まつて居る間—此の間は非常に長い樣に思はれたが—之に耳聳てゝ居た人々は心底からの胸騷ぎをさせて居た。ノーエル醫師は斯樣な危險な場合には慣れて居たとはいふものゝ、それでも、氣の毒にも、殆んど倒れかゝつて居た。彼の呼吸はひゆう〳〵と鳴り響き、齒はがち〳〵とかち合つて居た。そして體軀をもぢ〳〵させて位置を更へた時は其の節はぽき〳〵と音を立てゝ居た。

遂に跫音は階上に達し、軈て扉に手が掛かり、忽ち栓は音諸共に引外された。それから暫らく音がしなかつた。其の時ブラッケンベリーは王子が今か〳〵と待ち受けて、音も立てず身を引き締めて居たのを

見ることが出來た。今や扉は開いて薄暗い朝の光はバット部屋の中に流れ込んだ。見ると一人の男の姿が闘の上に現はれた。彼は身動きもせず立つて居たが、其の丈は高く、手には一つの短刀を持つて居た。夜明の弱い光りでは有つたが、此の男が上歯をむき出し、それをぎらぎらと光らせて居たのが善く見えた。其の大きな口を開けて居る狀は恰かも將に飛びかゝらんとする獵犬の樣で物凄いこと限りがない。又其の男は一二分間前迄は水の中にずんぶり浸つて居たものらしく、其處に立つた居た間も水滴が彼の濡れた衣服から床の上にポト〳〵と垂つて居た。

次の瞬間其の男は闘を跨げた。跳び掛つたかと思ふと息を止める樣な叫び聲がし、忽ち格闘が始まつた。そしてゼラルヂン大佐が未だ加

勢によう飛び出さない中に、王子は男の短刀を奪ひ何んとも出來ない樣に肩を摑んむ。

『ノエールさん、何卒か洋燈を點けて下さい。』と王子が言つた。

而して王子は捕虜をゼラルヂンとブラッケンベリーとに引渡して部屋の向側に行き、暖爐面に背を倚せて立つた。洋燈が點けられたとき、王子は常と變つて面貌に啻ならぬ嶮相を帶びて居たのが見られた。既う平世のフロリゼルでもなければ、無頓着な紳士でもなく、遣つ附けなければ已まない氣慨を示し、非常に興奮して居た威風堂々たるボヘミヤの皇太子で有つた。彼は今や、頭を擧げて捕虜となつた自殺倶樂部の會長に向ひ—

『會長、君は最後の陷穽を掛けたが却つて君自分がそれに係つたの

だ。既うそろ〳〵夜が明けんとして居る、君の命も最う今朝限りだぞ。君は今リゼンドの堀割を游いで來たのだらうが、それこそ君の最終の沐浴だ。君の老馴染ノエール氏は君の味方をして私を賣る處ではない、却つて君を我輩の手で裁判する爲め引渡して呉れたのだ。君が前日我輩を埋める爲めに掘つた墓は、全能の神の攝理の下に、今日君の骸を又と人の目に觸れない樣に埋めることになるだらう。君の命も今暫くだ、そして神樣も君の罪業には既う御懲りで有らうが、兎に角、暫時猶豫を與へるから望なら跪坐して祈禱を捧げろ。』

會長は一言も發せず、一指も動かさず、默して居た。彼は未だ王子の假借しない視線が自分の上に注かれて居るものと思つて居たもの、如く頭を頷垂れ床の上を陰鬱らしく凝視して居た。

『皆樣』とフロリゼルは平常の語調に戻つて、『之が長い問私の目を避けて居た奴です、併しノエール氏の御盡力で今は私の手中に落ちました。彼が犯した罪科は到底一朝一夕に御話しいたすことは出來ませんから、今は差し控へませう。併し、之丈のことを申し上げて置きましたら、大抵お察も附きませう、卽ち、若し此の掘割が彼の爲め犧牲となつた人々の血で一杯で有つたとしたとしても今之に沐浴して來た此の惡漢は今御覽になるよりも濡れ樣が少ない樣なことはないでせう、實に多數の人を殺したものです。私の性質として斯樣な事柄に於ても男らしくない事は、成る可くしたくは御座いません、で決鬪で雌雄を決しませう。併し御判斷を願ひますが、一體決鬪を申込むのは奴には過分の沙汰で寧ろ死刑執行と謂つた方が當つて居ます。ですから奴に決

闘の道具迄選擇さすといふことは餘りに勿體ないことで御座いませう、斯樣なことで生命を捨てるのは實に馬鹿らしいですからね。』と王子は刀匣の錠を開け乍ら、『而して拳銃の丸は紛れ中りが餘りに多過ぎますし、又如何に巧妙な且つ勇敢な射手もわな〳〵と戰慄して居るものゝ爲めに斃されないものでも御座いませんから、私は今刀劍を持つて相見え之で是非曲直を決定しようと存じます。そして皆樣も此の私の決心に御賛成下さるでせうと存じます。』

ブラッケンベリー中尉やオールーク少佐—此の話は主として此の二人に向つて話されたのだが—が賛成の意味を通じた時に王子フロリゼルは會長に向つて、『愚圖々々しないで早く刀を選び取られよ、一刻も早く雌雄を決したいと思ふから。』

會長は虜にせられて武器を取り上げられて以來、ずつと伏目になつて居たが、此の時始めて頭を擡げた。其の瞬間眉間にあり〳〵と勇氣を振り立て始めて居たのが見えて居たが、軈て勢込んで王子に訊ねた——

『私は縛を解いて貰つて相方共公平に立つて闘ふのですか。貴方と私と丈ですか。』

『君の爲めに左樣することにしよう。』

『さあ！』と會長は叫んだ。『五分々々なれば或は勝利は私のものかも知れません。併し左樣して下さるのが殿下に取つて立派な男らしい遣り方だと存じます。若し、私が殺されるとしても、私は歐羅巴に於ける最も俠義の有るお方の手に依つて死するので誠に本望で御座いま

す。』此の時二人の將校は會長の縛を解き突き放して遣つた、すると彼は卓子の傍に歩を運び非常に注意して刀を選擇し始めた。其の間彼は非常に意氣昂然として決鬪は俺のものだと謂はん計りの態度で有つた。傍に居た人々は、會長の完く自信に充ちたる顏付を見て、聊か胸を騷がせ始め、王子フロリゼルに今一度考へ直せと懇請して見た。すると王子は——

『那樣な大事件でも有りません、斯樣なことは啻の冗談事で、屹度直きに結末の附くことゝ思ひます。』

『殿下は餘り馬鹿にして手を出し過ぎ被成つては宜敷御座いませんでせう。』とゼラルヂン大佐は言つた。

『ゼラルヂンよ、私は無抵當の借金を返し損つたことはない筈だ。お

前は私の爲めに肉親の弟を亡くしたのだからお前に對しても此の男を遣つ附けなければならぬ義務が有る。そして屹度遣つて見せるからね。』

會長は念に念を入れて遂に一振の細身の刀を擇び出し、粗野なる態度の中にも會長たるの品位を保つて、用意が出來たといふ意味を通じた。危險が刻一刻と接近し、愈滿身の勇氣を振り立てなければならぬことを意識したときは流石の此の厭ふべき惡漢も、侮る可からざる雄々しき且つ一種見上げた風采を示すに至つた。

王子は手當り次第一つの刀を取り上げて言つた。

『ゼラルヂン大佐並びにノエール殿には何卒か此の部屋に居て待つて居て下さい。私は入魂の友人が此の事件に連關することは望ましく思

ひまん。オールーク少佐殿、貴方は可なりの御年輩で且つ世に定評のお有りになるお方で被在しやるから、何卒か會長の介添人となつて遣つて下さい。リッチ中尉殿は何卒か私の方に附いて下さい。若い方は斯樣な事柄は幾等經驗しても宜しいものですからね。』

『殿下、左樣して頂くことは誠に私の光榮とする處で御座います。』とブラッケンベリーは答へた。

『それは結構です。』とフロリゼル王子は答へ、『實は今少し重大な事柄で君のお役に立ちたいと思ひます。』

斯う言つて王子は三人の先導となり部屋を出て厨房の階段を下りて行つた。

取殘されたゼラルヂンとノエール醫師二人は窓を開け放し體を突き

出して今將に起らんとする驚天動地の悲劇の前兆なりと知りたいものと耳を聳て目を張つて居た。雨は今や全く晴れ、夜は殆んど明けて來た。そして種々の小鳥は花園の灌木林の中や、又打茂りたる高き森の上で頻りに囀り始めた。覗いて見ると王子と一行は暫らくの間今を盛りと咲揃つた叢林の間を小徑傳ひに辿り進んだ居たが、最初の廻り角を廻つてからは、木葉の打茂りたるが兩方から相重なり合つて居た故、其の姿は遂に見えなくなつて了つた。以後のことは殘つた大佐にもお醫者にも一向解らう筈はない。そして花園は非常に廣く、且つ決鬪の場所は家から遙か隔つて居たものだから、相合ふ劍擊戛々の音さへも二人の耳には入らなかつた。

『殿下は會長を墓の方に連れられましたな。』とノエール醫師は慄へ乍

ら言つた。

『神様よ、何卒か正しい方をお護り下さい！』と大佐は叫んだ。

斯くして二人は結果如何にと沈默中に事件の成行を待つて居た――

ノエールは恐怖の餘り戰慄し、大佐は苦悶の冷汗を流したまゝ。斯くして居る中に時間は用捨なく經ち、朝曦の光は益〻輝き渡り小鳥の鳴聲は花園の中で一際愉快相になつて來た。暫らくして、不圖、人々の戻つて來る跫音が聞えたので、二人は入口の方へと眼を轉じた。這入つて來たのは祈つた通り王子と印度軍隊の二將校で有つた。神は仍且正しい方をお助けになつたので有つた。

部屋に歸つて來るや王子は開口一番、『私は自分乍ら殺人をして悅ぶなど誠に慚愧の至りです。私の様な身分のものには不相當な短所だと

思ひます。併し、あの惡漢が生存して居る間は、恰かも疫病神にでも取掴まれた様に、誠に可厭で堪らなくなつたのでしたが、今度奴を片附けて了つたので心神爽快となつたこと一夜の熟睡にも勝る萬々です。そら、ゼラルヂンよ、』と王子は床の上に劍を投じて言つた、『此の刀にお前の弟を殺した奴の血が附いて居る。お前も定めし嬉しいだらう。併し乍ら、』と王子は無限の感慨に打たれたもの丶如く、『人間といふものは實に譯の解らないものだ！　彼を遣つ附けてから未だ五分間も經たないのだが既に私は此の不確實な人生に於ては果して復讐といふことは絶對に達し得るものか否か大いに不審を抱くに至つたのである。成程彼は確かに惡いことをしたのだが、誰有つてか其の罪科を元の通りに取直ほすことが出來よう？　彼が遣つて居た人殺といふ惡

事は—此の罪科で實は今吾等が居る此の家の如きも奴の手に入り斯の如き漠大な財産を殘すに至つたのだが—假令今彼を殺したからとて永久に人間の運命中に介在して何うしても消え失せるものではなからう。併し乍ら私は神樣の御裁判に依り世界が破壞する迄劍を構へて人を突いて居ても、ゼラルヂンの弟は蘇生りもしまいし、又彼會長の犧牲となつた多くの無辜の人々の不名譽も汚辱も如何ともすることが出來ないのだらう。併し兎も角人間の存在は斯うして奪つて了へば實に果敢ないものだが用ひて見れば誠に偉大なことも出來るものだ。嗚呼！』と王子は叫んで、『何事でも遣つて了つて見ると實に詰らないものだな。』と過去を追懷して遣瀨なき思ひに沈むので有つた。

するとノエール老人は、『神樣の裁判は最早爲されたので御座いま

す。之丈見れば最早澤山です。殿下よ此度の御教訓は私の胸を刳る樣で御座いました。何れ遠からず私の順番も來るで有らうと非常に心配して居ります。』

『私の言つたことは間違つて居たのです。私は罪人を既に罰して了つたのです、そして此處に私の側に過去の罪業を取消す爲め私を援助して呉れる人が控へて居ます。嗚呼、ノエール君よ、貴君も私も實に前途遼遠で、未だ爲す可き困難な且つ立派な仕事が澤山有るのです。そして吾等がそれを成就するまでには若い時分貴君が遣つた心得違の行爲を贖ふ以上のことをすることが出來るでせう。』と王子は諄々と說いて聞かせた。

『左樣すれば一先づ御免を蒙つて私の舊友の死骸を埋めて參りませ

う』とノエールは言つた。

（これで話も目出度御了ひです。別に言ふ必要もないことですが王子は此の探險に盡力した人々は誰も忘れることなく、自分が王位に就くや彼等を登用して今日に至る迄顯職に就かしめられて居ます。又他方王子は情に細かく謙讓の德に富み、彼等の私生活迄も顧慮して、其の家庭に一段の春風を添へられました。偖て此の王子が天帝に代つてなされた多くの珍らしき事件を悉皆取纒めますと此の地球を本で埋めることになるでせう。併し「大王金剛石」の成行に關する話は趣味津々としてフロリゼル王子の冒險談に勝るとも劣ることは有りますまい、いでや此の亞剌比亞人の話の跡を愼重の態度で尋ね續物語に取掛りませう、―先づ帽子匣の話から始めませう。―）

一夜の宿

フランシスヴイロンの話

偖て、頃は千四百五十六年十一月の下旬の事で有つたが、雪は凄じい勢で絶間なく降り續いて巴里の市街を忽ちに埋めて了ひ、風伯は時々狂ひ廻り、雪を渦卷に卷き上げてはパッと四方に撒き散らすかと思へば、何時の間にか袋の紐を引き締めて、枝も鳴らさず靜まり返へり白雪は片々又紛々として眞暗がりの夜の空からしと〳〵と降つて來て何時止むべしとも思はれなかつた。貧しい人達は眉を潤し乍ら、大空を見上げ、此の際てしもなく降る雪は一體何處から來るので有らうかと、頻りに不思議がつて居た。之より先、未だ弱年のフラシスヴイロン先生は、と或る居酒屋の窓際に居り立つて、抑々此の紛々たる白雪は、果してオリンパス山上に於て、異敎の大神ジユピターが鷲鳥の毛を毟り居るものなりや、將又天使の羽毛が自然と脱落するものなり

や、』といふ論題を列座の客達に提出したので有つた。『余はたゞ一介の貧窮文士に過ぎない、』と彼は續け言つたが、『此問題は聊か上帝に關係を有して居るから私は其の結論をば差し控えませう。』と逃げて了つた。其の時一座の中にモンターギスの無邪氣なる一老僧が有つたが、此の青年文士の諧謔滑稽及びそれに伴ふ奇異なる表情を愛でゝ、一瓶の葡萄酒を奢り、そして自分がヴイロンの年配には、又等しく不信心不敬虔な者で有つたといふ事を彼の白髯にかけて誓ひ力を込めて物語つた。

蕭殺たる寒氣は鋭く身に染み渡つたけれども、未だ凍り附く寒さになつた計りであつた、そして雪片は濕ぽくて綿の樣に柔かく、處擇ばずくつ附いて居た。巴里の全市は爲めに一面の銀世界となり、假令一

軍の兵士なりとも跫音一つ敵に知られないで、市街を横斷することが出來ようと思へる位で有つた。」若し塒に歸り惑ふた鳥が居たとすれば、上から巴里の市街を瞰て、大きな白い地面の樣に思ひ、そしてセイヌの黑い河條の上に架かつて居た多くの橋梁をば白くて細長い丸太位に見たで有らう。雪は堂塔伽藍の櫓に仕つらへて有る石材裝飾の中まで吹き込み、數ある屋上の壁龕にも一杯に積つた。又庭内なる多くの塑像の奇怪なる又は神々しい頭部は長い白い天鵞絨帽子を被つた樣になり、檐際に差しかゝつて居た樋口は、大きな僞鼻に變形して、其の尖端は彎曲し、破風や尖塔に附いて居た唐草は枕を縱にして一方を脹らせた樣な恰好になつて居た。そして風の止み間〳〵に敎會の境内では雪の塊が周圍の寂漠を破つてポテリ〳〵と落ちて居た。

聖ジョンの墓地に於ても等しく雪降り積り、墓標は皆行儀正しく白雪を戴き、高い家々の棟も同じく雪もて被はれ端然として其の周圍に列んで居た。お歴々の住民達は既うとつくに寝床に這入り、恰かも其の家々が雪の帽子を被つて居た如く、寝床帽を被つて夢も佳境に入つて居るらしい。其の近傍には、燈火と言つては殆んどなくたゞ教會の禮拝堂に掛つて居た一つの洋燈から小さな光がチラ〳〵と閃き渡つて、其の搖れる度毎に彼處此處に物影を投げて居た。柱時計は既に十時近くを指して居て、夜巡りは戟を小脇に抱へ提灯を携へて、寒さの爲め手を打ち乍ら、其の境内を視巡つて居た。併し、此の墓地近傍では別に怪むべき物も發見せず、何處かへ立ち去つて了つた。

此の近邊は四面皆寝靜まつて居たにも拘らず、墓地の垣と背中合せ

の一軒の小さな家の人達は何か不正の目的の爲めに未だ起きて居た。併し外から見ては何をして居るのか少しも分らないで、たゞ煙筒の尖端から一條の暖かい水蒸氣が立つて居て、其の周圍の屋根は雪が解けて居たことゝ、門前に半ば消えかゝつて居た五つ六つの足跡が有ることのみが目に附いて居た。併し其の窓扉の内側には詩人フランシス、ヴイロンと、彼が親しくして居た二三の人相の悪い仲間が汲み交はす盃に此の寂しい夜を愉快に過ごして居たので有つた。

暖爐には石炭が山の如くくべ込まれ、それが赫々と燃えて、迫持になつて居た爐口から強い赤い光を放射して居た。ピカーヂー派の僧侶ドンニコラスは此の暖爐の前に裾を捲くり、肥大な脛を左右に廣げて氣持好げに暖まつて居た。彼の後ろに寫つて居た擴大された影は部屋を

二分し、暖爐の光はたゞ彼の體の兩側の處から左右に發散し、又大股に誇いで居た足の間から小さな水溜の樣に光が映つて居たのみで有つた。彼は中々の飲酒家と見えて顏は麥酒に醉つた樣に血走つて居た。其の一杯充血した顏には血管が蟲の這つた樣に浮んで居て、普通ならば紫色で有るべき筈で有るのに、今それが靑白くなつて居た。是全く寒さの爲めで、彼は背を暖爐の火に向けて立つては居たものゝ、顏の方は寒氣で痛む程で有つたからだ。其の僧帽は半ば頭から落ちかゝり大きな首の兩側に衝き出て、何だか非常に奇妙に見えて居た。斯樣な具合に陣取つた彼は何やらブツ〳〵咳き乍ら、部屋を自分獨りの大きな體軀の影で二分して居た。

其の右側にはヴイロンとガイ、タバリーとが一片の羊皮紙の上に一

緒に頭を衝き寄せ乍ら坐つて居た。ヴイロンは『燒魚の歌』と題する一小詩を作つて居り、タバリーは彼の肩の處で頻りに稱讃の辭を呈して居た。抑此の詩人は人間の中でも眞の屑で、色は黑いし、柄は小いし、瘠せこけて頰は落ち込み、髮は少なく且つ黑かつた。彼は今二十四歲で有るが、今迄隨分亂暴を遣つて年月を送つて來たのだから、貪慾心は其の眼元にあり〳〵と見え、其の口元には邪惡の微笑を湛へて居た。狼の如く獰猛なる貪婪性と、豚の如く厭くことを知らぬ貪慾性とは一緒になつて顏中の筋肉を交々蠢めかして居た。要するに鋭くて醜く、全く娑婆的表情たつぷりの顏で有つた。手は小さくて其の指は小索の樣に節高になつて居て何でも引拷つて行き相で有る。そして今其の指は彼の前で激しくて物言ふが如き所作もて續け樣に搖らめき動

いて居た。タバリーの方は突拍子もない丁寧な、又常に人を褒める癖の有る可憐な虚弱漢で、それは其の押し潰された様な恰好の鼻や涎を垂らして居た口元の様子からしてよく分つて居た。主義も主張もない人々の生活をば如何様にも左右する力の有る不可避の運勢に由り、彼は或は最も上品な公民ともなり得たのかも知れなかつたのだが、今や彼は其の同じ運勢の手に由り泥棒となり果てたので有つた。

ニコラスの左側に[illegible]モンチニーとテヴナン、バンセットとの二人が[illegible]で居た。モンチニーは良家の生れらしく、躾も善く天使の降臨したのではないかと思はれる位で有つた。彼の體軀は嫋々として細長く、人品は何となく嫻雅に見え、そして其の小黒い顔は稍彎曲して居た。あの可憐なテヴナンの奴は今日は大層莞爾ものの有つ

たが、それも書間フォーブルグや聖ジャックで何か不正行爲をして懐を肥やし、そして今夜の賭事には始終モンチニーに勝越になつて居たからだ。彼は顔にはにやりと生氣のない笑を浮べ、其の禿頭には周圍に僅か計りの赤髪が有るのみで天頂から赭しやらけて光り輝いで居た。そして賭に勝つて金を自分の懐に入れるときは、クツ〳〵と腹の中で笑ひ乍ら、脹れ出た腹をピヨコ〳〵と蠢動してさも得意の容子で有つた。

『倍か濟か』とテヴナンが言つた。

モンチニーはしかつめらしく頷いた。ヴイロンは、

『或人は華かなる饗を擇び、
銀皿なる麪包と乾酪とを食らん』

と詩を書き乍ら、『或るは――或るは――おい、カイドーよ次を附けて呉れ』と少々困却の體。

タバリー先生はクス〳〵と笑つた。

『或るは黄金製の皿なる和蘭芹を』

と遂にヴイロンは書いた。

此の時、戸外では、風は段々と強く吹いて來て遂に吹雪を起し、時々勝誇つた樣な勢もてヒユー〳〵と吹き卷くり、それが煙突に吹き込んでは、氣味の惡い音を立てゝ居た。夜が更け行くに連れて寒氣は益加はつて來た。ヴイロンは唇を突き出し、颯々と吹く風音を、口笛とも唸りとも付かない樣な調子で眞似たが、之はヴイロンの不思議な人可厭がらせの奥の手となつて居たのでピカデリーの坊さんには殊の外

可厭がられて居た。

ヴイロンはニコラスに向ひ、『君には斷頭臺上のあの風の音が聞えるかえ？　罪人等はあの臺上で縊められ藻騷き踊つて死ぬるのだ。奴等はどんなに踊つても、それが爲め體軀が溫まることはよもなからうね。ヒユー〳〵！隨分吹くね！そら誰か今臺上から落こちたよ！三本股の柁杷の樹から實が落ちて又一つ少なくなつたな！おい、ドン、ニコラス、今晩は聖デニス街は寒いだらうね。』

ドンニコラスは二つの大きな眼をしばたゝいて何か言はうとしたが、結喉につかへて言へ相にもなかつた。それもモントフォーコンと言ふ大きな怖ろしき斷頭臺がセントデニス街のすぐ近くに立つて居たので、此のヴイロンの諧謔が非常にニコラスの急所を衝いたが爲めで有

つた。タバリーは柁杞の洒落が面白くて堪らなかつたので、非常に笑つた。彼は斯様な面白いことは今迄聞いたことがなかつたので、笑ひ笑つて兩方の脇腹を抱へてキャッ〳〵と狂ひ廻つた。處がヴイロンが彼の鼻柱を爪彈したので、其の笑は忽ち一變して今度は頻りに嘘をし出した。

『おい、其の底抜け騒を止して魚の同韻を考へて呉れないか』とヴイロンが言つた。

『倍か濟か』と此方ではモンチニーが固く執つてテヴナンに向つて言つて居る。

『宜いとも』とテヴナンは答へた。

『其の罎には未だ有るかね』と出家は訊ねた。

『新しいのを拔き給へ』とヴイロンは言つた。『まあ君の樣な大きな體

軀をして居ては、斯樣な罎の三本や五本飲んだつて何ともないだらう。併し、君はまあ那樣な體で天國に行かれると思ふのかい？　此のピカーヂーの一人の坊主を連れて行くに天使が幾人要ると思ふのだい。それともエライアスにあやかつて天國から馬車でも差向けて貰へると思ふのかい？』

Hominibus impossibile

『那樣なことは到底人間の力の及ぶ所ではないが、神の力には叶ふことだ、御心配御無用よ』と出家は洋盃に酒を注ぎ乍ら言つた。

タバリーは復盛に吹き出して來た。

するとヴイロンは復た其の鼻先を爪彈して——

『那樣なに笑いたいのなら、僕が串戲を言つたとき笑ひ給へ』

『だつて、御出家さんのは全く甘いんだもの』とタバリーは遮つた。

ヴイロンは可厭な顔をしてタバリーに向ひ――

『魚の同韻を考へて呉れ給へ。拉典語なんかには用はないぢやないか。駄背姿の猛烈な爪を有つて居るあの惡魔が學者僧カイドー、タバリーを天國の神の裁判の前に呼び出すときには、君は拉典語なんか一つも知らなかつた方が宜いと思ふだらうよ。』と言つて今度は聲を秘め囁て『惡魔に就いて思ひ出したが、あのモンチニー君を見給へ！』

三人は密かに賭博を遣つて居たモンチニーの顔を密かに窺つた。彼は風向がよい方ではなかつた。で其の顔と言つたら實に奇態で、口は一方に捻り、片方の鼻の孔は殆んど塞ぎ、片方は思ひ切り擴げて居た。彼は不機嫌相な澁顔をし、そして、怖ろしい子守の譬喩に言ふ樣に氣味の惡い黑犬を背負つて居て、苦し相な息遣をして居た。

『あの顔附では事に由つたら相手を殺さないものでもなからうよ』とタバリーは眼を圓くして私語つた。

出家は此の時身振をして爐邊の方に向き替り、兩手を餘燼の上に翳した。併し、夫れも人を殺すといふ語を聞き道義的感情の過剩を來した結果ではなくて、全く寒さの爲めに外ならなかつた。

『さあ、此の歌は何うだい。これ迄の處は何うだかなア？』とヴイロンは聲を張り上げ、手で柏子を取り乍らタバリーに讀んで聞かせた。

ヴイロンが讀んで第四韻の處に來るや、二人の賭博打モンチニーとチヴナンとの間に時の間では有つたが由々敷致命的の騷が始まつたのでそれから先を讀むことが出來なかつた。卽ち二人が一廻り勝負を濟

ませたとき、テヴナンが自分の新なる勝利を叫ばんとして將に口を開かうとして居た刹那、モンチニーは毒蛇の樣に迅速に相手に飛び付いて柄も徹れと其の心臓目掛けて短刀を刺し通した。此の突擊は頗る其の効を奏して、テヴナンは一聲もえ揚げず、一歩もえ動かず、其の儘息を引き取つたので有つた。斃れた體は一二度縮繕け、手は開いては又閉ぢ、足は床の上でガタ〳〵と二三度音を立て、そして頭は一方の肩の上にグタリとなり目は開いた儘で有つた。斯くの如くにしてテヴナン、バンセットの魂魄は遂に飛び去つて再び天帝の許に還つたので有つた。

其處に居合はした人々は直ちに飛び立つたが、殺戮は眞に一瞬間に遂行せられたので、最早萬事休焉！。四人は寧ろ呆氣に取られて、互

に顔を見合はせて居た。そして死人は、一種異樣な見るに堪へない樣な醜惡な眼付で、天井の一隅を流眄に見守つて居た。

『南無三寶！』とタバリーは言つて拉典語で祈禱をし始めた。

突然ヴイロンはヒステリー的な笑を仕出した。彼は一歩進んでテヴナンに近づき、小首を傾けて可笑しなお辭儀をしたが、又前よりも一層聲を上げてカラ〳〵と笑つた。それから彼は俄かにだらしなくドカリと腰掛の上に腰を卸ろして、或は五體を切々に碎きはすまいかと思はれる位劇しく笑ひ續けたので有つた。

四人の中一番早く常態に復したのはモンチニーで、『野郎全體何を持つて居るのかしら、』と言つて、斯樣なことは朝飯前だと言はん計りの手附で死人の衣嚢を搜し、金を取り出してそれを机の上に載せ、四つ

に山分した、『さあこれが君達の取前だ。』

出家は太い息を吐き乍ら彼の分前を受取つて、死んだヴナンを窃かに見遣つた。其の時死體は段々と沈んで椅子の上から傍に轉がり落ちようとして居た。

ヴイロンは軈て笑を抑へ、『此處に居るものは皆此の事件に關係して居るので、皆絞刑に處せらるべきだ——此處に居ない一味のも同樣だ。』と言つて右手を高く擧げて絞首臺上に立つたときの眞似をし、そして頭を一方にかしげ、舌を長く吐き出し愈々絞められたときの樣子をして見せた。それから彼は自分の分前を衣嚢に納め、笑つた爲め血の循環が變になつたのを恢復せしめようとしてか頻りに足をばた附かせた。

最後に手を出したのはタバリーで、彼は机に突進して同じく分前を取り、之を衣嚢に入れて部屋の一方にそつと立ち退いた。

モンチニーはテヴナンを再び椅子の上に眞直に寄せ縋らせ自分が刺込んだ匕首を拔き取つた。すると鮮血は盛んに迸り出た。

『諸君皆此處を逃去つた方が宜いでせう』と彼は死人の胴衣に短刀を擦り付け鮮血を拭ひ乍ら言つた。

『左樣した方が宜いかも知らん』とヴイロンは片唾を呑込んで言つた。

『何だ忌々しい此の太つた頭は！』と突然話頭を換へて、是を見ると胸が惡くなつて痰の樣に何か咽喉につかへて來る。又死んでも猶ほ赤い頭髮を生やして居るなど、一體不都合ぢやないか。』と言つて堂と計り腰掛の上に座り、嫌惡の餘り手で全く顏を蔽つて泣き出した。

モンチニーとドンニコラスは此の樣子を見て大聲を擧げて笑つた。タバリーさへも力なげに之に和した。

ニコラスは、『弱蟲泣きたけりや勝手に泣け』とヴイロンに言つた。『僕は奴に貴樣は女だと始終言つて遣つて居るのだ』とモンチニーは嘲笑し乍ら添口した。今度は死體に向ひそれを一搖搖つて、『眞直坐らないか』と語を續け、『ニコラス、其の火を踏み消して呉れ。』

併しニコラス先生は那樣なことでなしに遙かに旨い仕事に從事して居た。即ちヴイロンが少し前迄詩を作りて居た床机の上で、赤い髮の爲め惡感を生じ、他愛もなく戰慄し乍ら座つて居た間、密かに其の財布を窃取しようとして居たので有つた、モンチニーとタバリーは之を見て眞似で獲物の分配を[illegible]に旨く

大正五年六月二十三日印刷
大正五年六月二十八日發行
三十版

定價金九拾五錢

著作者　三上節造　東京市麻布區坂下町十三番地
發行者　北原鐵雄　東京市小石川區西江戸川町二十一番地
印刷者　細萱武四郎　東京市小石川區西江戸川町二十一番地
印刷所　江戸川印刷株式會社

東京市麻布區坂下町十三番地
發行所　阿蘭陀書房
振替東京一四四八九番

著作權所有

文學博士 上田敏先生序
文學士 三上節造先生譯　石井柏亭先生畫

新譯
繪入

新アラビヤンナイト　中卷　近刊

大王金剛石物語（ラジヤースダイヤモンド）

□帽子箱の話
□青年牧師の話
□青年銀行家の話
□王子と探偵
マレトロア家の扉

□咲き亂れたる薔薇の花園に燦爛として飛散せる金剛石の秘密を知るのものは誰ぞや。恐るべき大王金剛石（ラジヤースダイヤモンド）の惡魔の如き誘惑は謹直なる青年牧師を忽ちにして泥棒と化せしめ之に配するに老猾無賴の老總督の惡計密謀を以てし、更に青年銀行家の冒險に至りては奇又怪。フロリセル王子の義俠と決斷は果してこの大寶石の魔力を打破し得るや否や變幻極まりなきこの物語は今や自殺倶樂部以上の誘惑と魔力とを以て諸君の前に展開せんとす。

□夜明前の二時間!! 絞殺か? 結婚か? 青年士官と花の如き美人の美しき戀のローマンス!! 不可思議なるマレトロア家の扉を開くべき秘密の鍵は今此にあり。

阿蘭陀書房新刊書

文學博士 森鷗外著及譯
醫學博士
詩集 沙羅の木 四六判布製 定價壹圓 送料八錢

文學博士 上田敏撰註
小唄 小形 定價六拾五錢 送料六錢

北原白秋著及畫
歌集 雲母集 四六判 定價壹圓五拾錢 送料十二錢

北原白秋著及畫
抒情小詩 わすれなぐさ 小形 定價九拾五錢 皮製美本 送料八錢

22-175

吉井勇著
歌集 未練
小形 定價六拾五錢 送料六錢

文學士 松村武雄著
印度文學講話
四六判 定價壹圓貳拾錢 送料八錢

水野葉舟著
ハガキの書き方
小形 定價六拾五錢 送料六錢

水野葉舟著
一日一信（一年間の手紙の實例）
近刊

長田幹彦作
吉井勇作
中澤弘光畫
繪入文集 舞姿
近刊

71
577

終